

東京女子専門學校教授 岡本すみ研究

古代オリエントの装服の
デザインと裁縫

東京女子専門學校 研究部
渡邊女學校

技
査
ば
種
て
諸
章
貢
御

滋



序

家事・裁縫・手藝について近來學術上からも、技術上からも或は又教育上からも、種々なる研究調査が行はれるやうになつたことは斯界のため誠に喜ばしいことである。本校に於ては久しき以前から各種の調査研究を行ひその報告書も相當の數量に達してゐるが、世の趨勢に鑑み、其等のうち特に研究家諸姉の御参考に適するものを選び、極めて簡明な文章に改め最安價に順次刊行して多少なりとも斯界に貢献したい念願である。教員諸姉の御一讀を給り且御批正を受くる事を得ば、望外の幸福である。

昭和九年十月

東京女子専門學校長 渡邊 滋
渡邊女學校長

例 言

- 一、本書は、著者が実際に衣服の裁縫に従事する立場から、現代の衣服（直接には洋服）のデザインと裁縫との、参考資料とする目的で書いたものである。
- 一、著者は古代オリエントの服装の資料を実際に見て居らず、寫真を見るのみであるから、不備な點の多い事を怖れる。
- 一、本書は權威ある學者の研究の結果を綜合して記述した所が多い。次に引用書及び参考書を記載し、深く感謝の意を表すものである。

引用書及び参考書

“A History of Costume”. by Carl Köhler.

“Vom Lendenschurz zur Modetracht”. von Hans Mütted.

“Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume”. by M. G. Houston and F. S. Hornblower.

“Textiles and Costumes among the Peoples of the Ancient Near East”. by Henry F. Lutz.

“Costum throughout the Ages”. by Mary Evans.

“Le Costume”. F. Hottenroth.

世界美術全集第一卷

- 一、後藤守一先生に御校閲いただいた事を此所に深く感謝す。
- 一、各民族の衣服の裁斷を記述するには、其の民族の體格を明かにし、それに依て寸法を記載すべきであるが、我が國の衣服の裁縫上の参考とするといふ上から、便宜の爲、記述する寸法は、總べて我が國人に適した

ものにしたのである。

一、圖中の寸法は纏を單位とした。

一、衣服着用の像に據て、布の裁斷、布の縫ひ合せ方は推察せられるが、縫目に至つては衣服の遺物がない限りは不明である、故に此所に裁縫と云つても、布の縫ひ合せのみである事を附記して置く。

一、本文中に挿入した圖は、文章中に番號のみを記し、口繪としたものは、其の所在の頁數を本文中に附記して置いた。

小 序

此の十年來、我が國の洋服は男子は云ふまでもなく、兒童に婦人に非常な勢を以て廣く着用せられ、我が國民服の一つとなつて來た。併し其のデザインは、今なほ歐米のよきものを取り入れるといふ事に攷々汲々として居る状態である。彼の衣服文化を充分に取り入れる事は、飽くまで必要な事であるが、將來は我が國獨特のデザインが創作されるべきで、それが我が國人に用ひられるのみでなく、延いては現在と反對に歐米に輸出するやうになりたいと希望するものである。

歐米の衣服のデザインを見るに、我が國に於ける衣服の様子の創作の場合と同様に、服装史上に表はれた衣服、又は他民族中に見られる衣服からヒントを得て、創作せられて居る場合が相當に多い。故に衣服の歴史的及び民族的研究が必要である。此處に其の第一歩として、世界文化の根源地である古代オリエントの服装のデザインと裁縫とに就て觀る事としたのである。

昭和九年十一月

著 者 識

古代オリエントの服装のデザインと裁縫

目 次

緒 説	1
古代エジプト	4
腰 紐	4
ロアックロス	5
毛皮のラップ	9
スカート、スカートの前の垂飾	10
カラジリス	12
ネックレース	15
ケ ー プ	16
ク ロ ー ク	17
ロ ー プ	18
ドレイパリー	20
髪風及び被物、履物	24
エジプトの衣服の概括	25
古代エチオピア	25
古代西部亞細亞の諸民族	27
シ リ ア	23
フェニキア	30
レ ト ニ ュ ー	31
ヘ ブ リ ュ ー	34

ス メ ル.....35
 アッシリアとバビロニア.....37
 メディアとペルシヤ.....41
 スキティア.....44
 バルティア.....46
 サルマティア、ダシア、イリリア.....47
 ヒッティト.....50
 織物に就て.....51



第一圖 腰紐を着けた少年
 (古代エジプト)



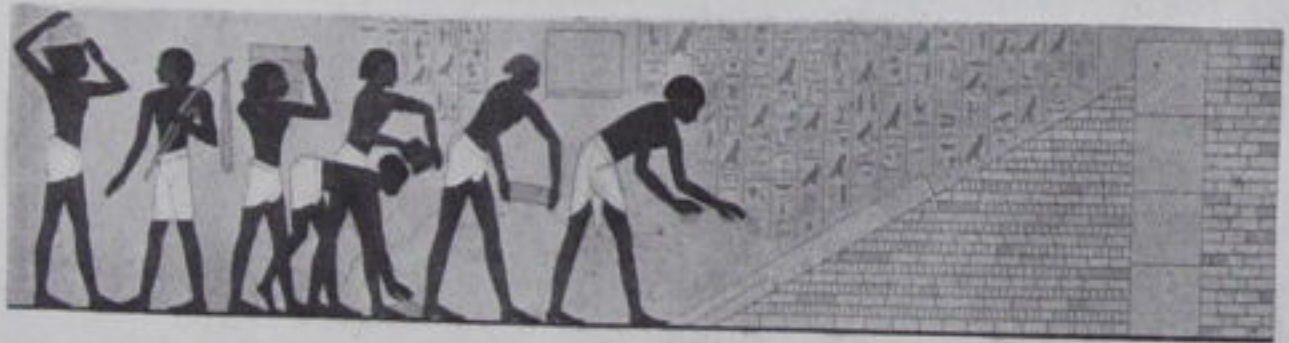
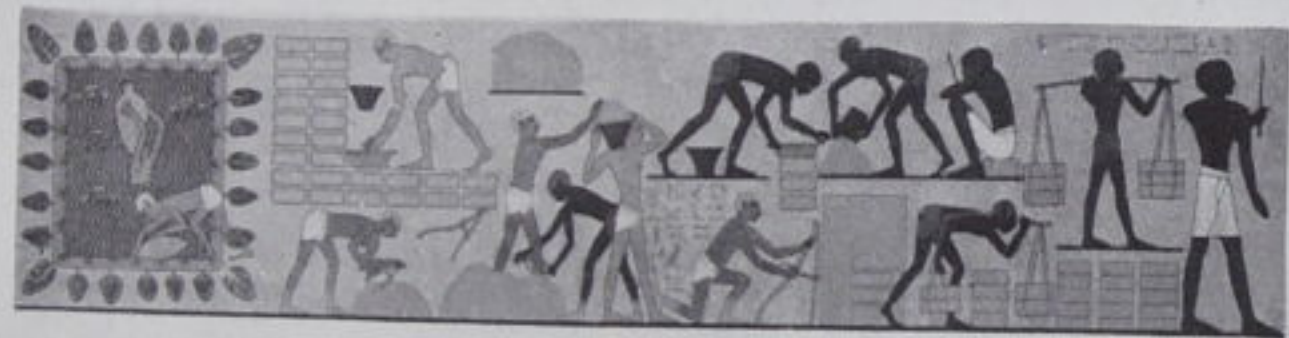
第三圖 ロアंकローズ着用の男子
 (古代エジプト)



第二圖 ロアंकローズ着用の男子 (古代エジプト)



第四圖 ロアングロース著用の上流男子（古代エジプト）



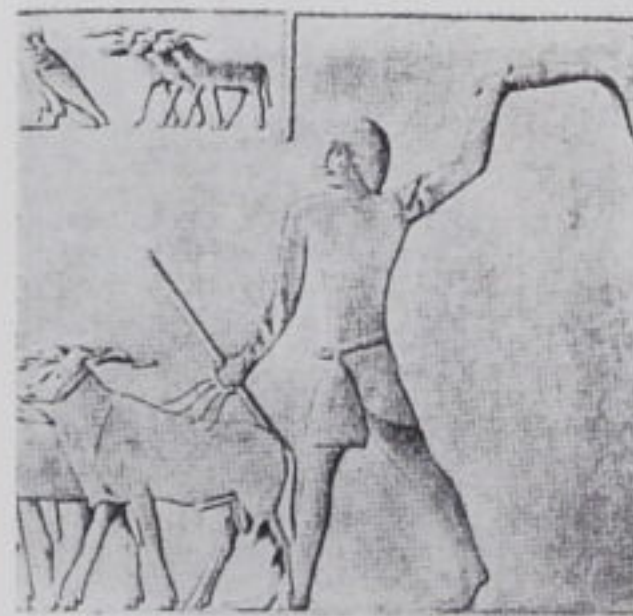
第六圖 ロアングロース著用の工人（古代エジプト）



第七圖 ブリーテッドロアングロース（古代エジプト）



第八圖 ブリーテッドロアングロース（古代エジプト）



第五圖 ロアングロース著用の男子（古代エジプト）



第十五圖 ストラップ附のカラジリス
(古代エジプト)



第十六圖 カラジリス著用の奏樂女
(古代エジプト)



第二十一圖 クローク著用の王
(古代エジプト)



第二十五圖 ロープ著用の男子
(古代エジプト)



第二十七圖 女子のロープ
(古代エジプト)



第十七圖 長い筒袖のカラジリスの着用女子
(古代エジプト)



第二十圖 クローク著用の王妃
(古代エジプト)



第二十九圖 帯を締めるロープを著した男子
(古代エジプト)



第三十一圖 帯を結びたれたロープ
(古代エジプト)



第三十二圖 ドレイマリー
(古代エジプト)



第五十八圖 房付きの掛布 (バビロニア)



第五十九圖 裾に房の付いた貫頭衣
(バビロニア)



第六十二圖 クローク着用の男子
(アッシリア)



第五十五圖 数段の房附のスカート (スメル)



第六十三圖 クローク着用の女子
(アッシリア)



第六十九圖 貫頭衣とズボン
(ペルシア)



第七十圖 寛衣 (メディア)



第六十九圖 華麗な模様の衣服（アッシリア）



第八十圖 ゲルマン族の原始時代のズボン



第八十二圖
ヒツテイド人短衣

古代オリエントの服装のデザインと裁縫

緒 説

衣服の歴史的及び民族的の研究

衣服のデザイン及び裁縫を發達させやうとするに當り、其の基礎知識となすものの一つは、古今東西の服装の歴史的及び民族的研究である。歴史的研究からは、衣服の永久的要素と一時的要素とが明かになり、民族的研究からは、普遍的型式と民族性に據る特殊相とが示され、是等に依つて將來發達させて行くべき方向と資料とが得られるのである。

服飾の起原と發達

人類の原始に就ては、なほ明瞭にせられぬ今日、服飾の起原も同様であつて、たゞ推論するのみである。是れに種々な説があるが、其の中の妥當と考へられるのは、人類の原始時代は裸體で暖地に生活したであらう。而して衣服の起原は、身體を裝飾するといふ心理から著けられ初めたものであつて、後ち人類が寒帯地方にも熱帯地方にも移り住むやうになつて衣服が寒暑を防ぐものともなり、又身體の外傷に備へるものともなり、羞恥心から禮容を整へるものともなり、其の他身分を表したり、職業に適應したり、種々の目的の元に發達して來たといふ考へ方である。

其の發達上には、人類が民族的特色を持つやうになつたのと同様に、衣

服にも民族的特色が表はれ、又諸般の文化が時代に依て變遷するのに伴ひ、衣服も其の一つとして時代的特色を表して来たのである。其の變遷發達に二傾向がある、一つは其の民族の力に據て獨特の發達をなす時と、一つは他民族の勝れた文化を模倣する爲に、其の地の氣候風土に適應せぬものであつても、其の衣服に遷るといふ場合とである。而して一民族の力に依て、其の衣服の様式が極度に發達して來て、最早其の衣服文化をそれ以上大きく變化し發達させる事の出来ないやうに行き詰た時、他の民族の文化を取り入れ其の衣服を模倣し、一時は其の民族文化の特色さへも見られぬ觀を呈するが、其れが更生する力となつて、次には其の民族獨特の衣服へと發達させて行くといふ場合が往々見られる。

服飾の根本型式

(一) 服飾の原始的型式

裸體に文身したり、又頸、腰、腕、足、肩から褌形等に、紐状のものを纏ふ裝飾を、服飾の原始型と見るべきである。(Die Frauenkleidung von Stratz 参照) 現今なほ熱帯地方の未開人に行はれる文身及び植物の纖維等を肩より腋下へと斜に懸けたり、腰紐、首飾、釧、等を付けるのが此の原始的服飾である。

而して是等は一方に衣服として後に説く様式に發達すると共に、他方には純粹の裝身具として發達し用ひられて來て居るのである。

(二) 氣候に據る衣服の構造様式の二系統

原始的服飾から發達して、氣候に應じるものとなつてからは、衣服の構造は寒熱の二方面にそれぞれ異なる型式を採るやうになつた。

(1) 熱帯型服飾

(イ) 腰布及びスカート

(ロ) 寛やかなチュニック(貫頭衣ともいふべきもの)

(ハ) 掛け布(ドレイパリー Drapery) 身體に掛ける布で、スカーフ、ケープ、クローク(袈裟式衣ともいふべきもの)等

(ニ) サンドル(Sandal)型の履物

(2) 寒帯型服飾

(イ) 體の形に合ひ密着したシャツ

(ロ) スカート

(ハ) スボン

(ニ) 靴式の履物

熱帯型の服装は、單に裝飾を目的として居るので、労働に不便であり、寒帯型の服装は、防寒を主として體の形に合せて作られて居るから労働に便利である。故に文化の進むに隨ひ衣服を必ず着する様になつてからは、熱帯地に於ても、労働服には寒帯型を用ひ、裝飾本位の服装には、寒地に於ても熱帯型の持つ裝飾的型式を取り入れて居る。

古代オリエントの服飾の概観

世界の文化の源泉地といはれる古代オリエント即ちエジプト及び西部アジアの地方は、服飾に於ても後のアジアに歐洲に相當の影響を與へて居り、西洋服装史は此の地から説かれる、又支那の漢代より始り隋唐に盛んに用ひられた胡服、及び同じ流れの我が國の上古及び奈良朝時代の衣服に通じるものが西部亞細亞地方の民族の服装に見られる。

黒海を中心とする地方は、寒帯型の服装であるが、エジプトやメソポタミヤの地方に於ては、熱帯型の服装が用ひられ、此の地方の文化が偉大な

る發達をなして居つたのに伴ひ、其の服装も熱帯型としての種々の美しいデザインが作り出されて居り、現代に取り入れられる點が多く見られる。

古代エジプト

古代エジプトは世界文化の源泉地の一つと見られる地であつて、先史時代は西紀前一〇〇〇〇年から始り、西紀前七五〇〇年に終ると云はれる。次に歴史時代に入り、國家的統一がなされ、西紀前三四〇〇年から二一〇〇年に至る間、第十一王朝迄を古王國時代(Old kingdom age)と呼ぶ。後ち國勢が衰へたが再興して第十二王朝より第十七王朝に至る間を中王國時代(Middle kingdom age)と云ひ、西紀前二一〇〇年から一七八八年迄である。次に又衰へたるを興して第十八王朝から第二十六王朝に至り滅びるまでを新王國時代と云ひ、西紀前一五八〇年から西紀前五〇〇年に至る間である。此の間凡そ五千年の長い歴史を持つ國である。

此の地方は熱帯であるから、服装は裝飾本位である。

腰紐 (Waist string)

原始的な服飾で腰に紐状のものを巻き裝飾としたのである。其れは柔かな葦などの草や木の枝から取つた纖維で作られた紐で、先史時代から用ひられて居る。神のミンの彫刻像は、此の腰紐を八回も巻き付けて其の結んだ端は床まで垂らして居る。(Textiles and Costumes 102 頁) 是れは後に説くスメル人(Sumerian)の先史時代にも見られる。此の腰紐は男子のみではなく、女子にも用ひられた事は、口繪の第十六圖の中央の奏樂女(新王國時代)に見られ、その他女奴隸や舞踏女の彫刻像にも見られる。(Die Frauenkleidung von Stratz 参照) 此の原始的な服飾は古王國時代以後は

少くなつたが、新王國時代になつても特殊な婦人や子供にはなほ用ひられて居る。第一圖は第十八王朝の少年像で、腰紐を著けた姿である。

第一圖——腰紐を著けた少年(新王國時代) 口繪第一頁参照

ロアングロス (Loin-Cloth) 腰布

腰に纏ふ布で、是れは腰紐から發達したものと見られる。西紀前三〇〇〇年に既に用ひられて居り、古王國時代には男女貴賤の區別なく、同様のものが用ひられたが、後には主として男子に用ひられ、男子の一般の服装となつた。新王國時代になつても奴隸工人等の階級では、是れが唯一の服装であつた。ロアングロスの形は初は體に密着したものであつたが、上流人が用ひるものは次第に緩かに纏ふやうになり、丈幅ともに大きくなつて、纏ひ方も種々に工夫せられるやうになつた。總べて衣服は次第に大きく裝飾的になり、型式化するのが古今東西を通じて見られる發達の型式である。材料は一般に白色の麻布で、上流の人達は其の薄地のよき地質が用ひられた。

種々なロアングロス

(1) 第二、三、四圖に示すもので、此の裁斷は長方形で、(中には裾の角を丸く切り落したのもある)。幅は五〇極位で腰から膝までの高さであり、長さは種々で、腰に一重巻き前の中央にて丈の兩端が突き合せになるもの、又二重に巻いたものもある。二重に巻くものは右から後へと巻いて行き、巻き終りは前の中央にて特殊な三角形に折り返して居る。其の巻き初めと終りとを上部で結び合せたものもあつたらしいが、大部分は上部に別に紐を付けて其れで結んで居る。其の紐の付け方は二本の紐を上

部の両端に縫ひ付けたものもあり、又上部の丈全體に腰紐を縫ひ付け其の紐丈の餘りで結ぶ事もあつた。

第二圖はマスタバ内壁浮彫で第三王朝のものである。貴族夫妻と其の召使達の像であるが、男子は總べて簡単なロアングロスのみである。

第四圖「上流人の狩獵の圖」(テーベ墳墓壁畫)、新王國時代のものである、是れは紐を前に長く結び垂らして居る。

第二圖——ロアングロス着用の男子 (第三王朝) 口繪一頁参照

第三圖——ロアングロス着用の男子 (古王國時代) 口繪一頁参照

第四圖——ロアングロス着用の上流男子(新王國時代) 口繪二頁参照

此の他次の圖に、此のロアングロスの着用の姿を見る事が出来る。

「クネムヘテブ像」(サッカーラ發見、古王國時代のもの、世界美術全集第一卷第四十五圖)。

「村長の像」(古王國時代のもの、同書第四十八圖)。

「麻の畑に働く人達の圖」(Textiles and Costumes 第四圖、第五圖、第九圖、新王國時代のもの)。

(2) 又四角な布を前の上部の結び目から下げて飾りとして居るロアングロスもあつた。第五圖は第十五王朝の彫刻で、羊飼の男子が是れを着けて居る。後ちには此の垂布が大きく誇張せられた。

第五圖——ロアングロス着用の男子(中王國時代) 口繪第三頁参照

(3) 新王國時代以後に一般に用ひられた様式は、丈の兩下端が丸く切り上げられて居り、其れを一重巻いて前の中央にて丈の兩端を突き合せとなし、其の丸く切り上げられた下から、細い幅の布を垂らすやうになつて居る。労働には是れを後へ引き上げて居る。

第六圖は第十八王朝の風俗畫である。此の他「農作の圖」(Textiles

and Costumes 第七圖) にも見られる。

第六圖——ロアングロス着用の工人(新王國時代) 口繪第二頁参照

(4) プリーテッド、ロアングロス、是れは垂直に細い折り襷を寄せたもので、全體に寄せたのと、巻き終りのみに寄せたのとある。古王國時代の第三王朝から既に見られ、其後も引き續き行はれて、新王國時代の末期第二十王朝にもなほ用ひられて居る。是れは特に身分高き人に使はれたらしく、神や王に、見られるものである。此の細い寄襷は熱帯地として體に密着せず着心地がよく、且つ見た所もリズムをなして美しい。

材料は白色で織絲の細い織り目の粗い羅の麻布であつたらしい。

此の細いプリーテッドは諸民族に行はれるもので、後のフェニキヤ、ギリシャ、ローマにも、プリーテッドを全體に寄せたチュニックが着られて居る。現在にても中歐地方には、手風琴形のプリーテッドとて、是れを全體に取つたスカートが、國民服として用ひられて居る。此の材料も同じく白の麻布の薄い地合である。又東洋に於ては朝鮮の高句麗の古墳の壁畫にも此のスカートを著けた婦人があり、琉球に於ても凡そ三百年前のものと云はれる王の侍女の裳が、同様の細いプリーテッドで、蹴廻し六米位を八〇幅位に寄せて居り、此の材料は芭蕉布らしく折り目の付き易い硬く薄く透く地合である。

現在も歐米に於てドレスのスカート、カラー、カフス等に、此のプリーテッドが用ひられて居る。此のプリーテッドを寄せるのに、現在はミシンにてなすので毛織にも絹布にも寄易に出来るが、ミシンのない時代に手でなす事は、非常な手数のかかるものである。

第七圖は「ヘシレーの板扉」(サッカーラ發見) で第三王朝の重臣の像である。此のロアングロスのプリーテッドは、綾目に編むか又は織られて

居る布の、其の綾の山形がブリートをなして居る如く、彫刻せられて居る。是れを見ると此のブリートは硬い繊維で綾織又は編む爲めに、自然に山形に高低が出来たものであらうかとも想像せられるのである。なほ第十九王朝の遺物の麻布に經にしぼの寄つたものが見られる。(Textiles and Costumes 第三十二圖参照)

第八圖はセソストリス王一世の像でこれは中王國時代の王である。此の腰布は前の中央の垂布に水平のブリートが寄せられて居る。

第七圖——ブリーテッド、ロアックロス(古王國時代) 口繪第三頁参照

第八圖——ブリーテッド、ロアックロス(中王國時代) 口繪第三頁参照

なほブリーテッドロアックロスを見る資料を次に挙げる。

男子の像 (A History of Costume 第八圖)。

ラノフェルの像 (古王國時代の王である。世界美術全集第一卷第四十六圖)。

ベルヘルノフレットの木彫像 (第五王朝の作、同書第四十九圖)。

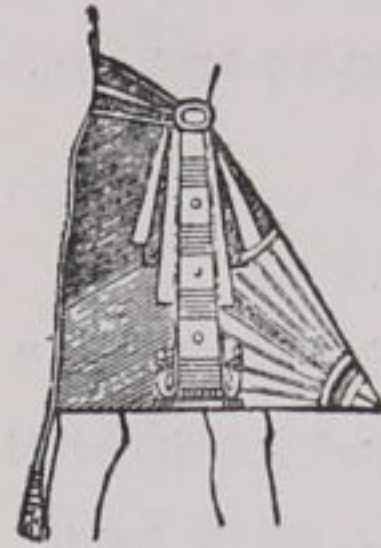
太陽神ホルスの像 (同書第六十六圖)。

ラムセス六世の石刻像 (カルナック発見、是れは二十王朝の王である。同書第六十六圖)。

(5) 裝飾せられたロアックロス

第九圖に示すロアックロスは、貴族が着用するもので材料は貴重な布や金色に塗られた革などを用ひ、又刺繍や繪が畫かれて居る。形は長方形の布で、是れを腰に巻き、上部に細い紐を締め、其の紐を後に長く結び垂れる。是れをエジプト人は shendot と呼ぶ、第五王朝の頃貴族等は是れの着用を許される事を熱望した。十七王朝から十八王朝の初めにかけては、上流人は獵に漁に是れを着け初めた。其れ故中王國時代に濫に

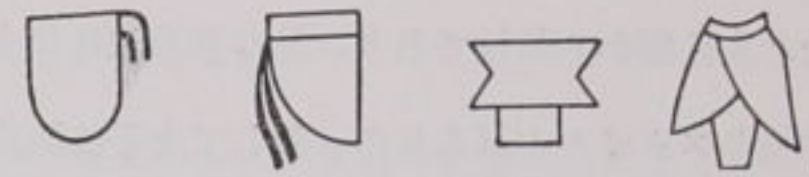
第九圖



シェンドット着用の男子 (古王國時代) (古代エジプト)

着用する事を禁じたので、十八王朝以後は許された少数の人々が、祭の日に着用するやうになつた。(Textiles and Costumes 118頁に據る)

以上はロアックロスの形を、繪畫や彫刻に見たのであるが、象形文字にてロアックロスを表はすのに、次の四種の形がある。



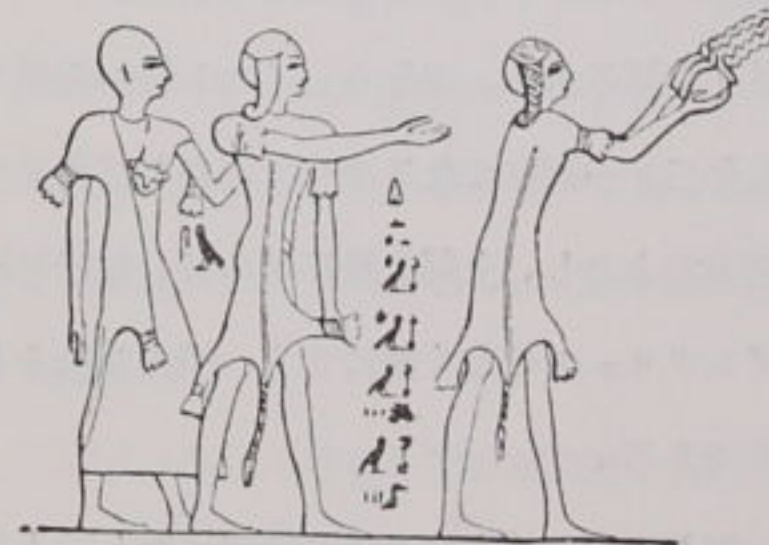
是れに據ても其の實物の形、紐の付け方の異つて居る所が知られるのである。

ロアックロスの種々な形と着裝法を見るには Le Costume. F. Hottentotp. 第1頁第一圖参照

毛皮のラップ (Wrap) 掛け布

肩から豹の毛皮を懸ける、是れは神官に用ひられて居る。恐らく原始的衣服の意味か、宗教的意味を表はすものであらう。第十圖に其の着用法が

第十圖



豹の毛皮のラップを着した神官 (古代エジプト)

第十一圖



ドレイバリーの上にラップを着した貴族の男子

見られる。初めは裸體に掛けたのであらうが、後にはロアングロスと共に着用したり、第十一圖の如くドレイパリーの上に用ひるやうになつた。

スカート (Skirt) 裳

(ロアングロスの丈の長いのをスカートと呼ぶ事とする)、ロアングロスから發達したもので、第四王朝の頃から身分の高い男女に用ひられ初めた。丈は腰から腓位であり、其の着法は男女異り、又男子の中にも二三の異なるスタイルが見られる。概して女子は胸高にスカートを着け、男子は低く下腹部に締めるといふ特色が表はれて居る。

(此の胴を締める位置が男子は低く女子は高いといふ特色は、古今東西を通じて各種の衣服に見られる所であつて、是れはそれぞれ着法上の氣分に、又體格上に、適する爲めではなからうか。)

材料は、白色の麻布が多く用ひられ、王や高級の人達のもの、特に薄地であつた。後には模様を染めや繡で表はしたものが見られる。

スカートの種々なスタイル

(1) 第十二圖はクインの姿で、胸高にスカートを着けて居る。此のスカートは、裾に經絲の房が見えて居るから、布をウェイスト線から裾までの長さに切り、幅は蹠廻しを二五〇極位になるやうに、布を二枚又は三枚取り、幅を接ぎ合せて長方形となし、上部を縫ひ縮めて、腰紐を縫ひ附けたもので、是れをロアングロスの如く體に巻き、紐丈の餘りを前に結び下げたと見られるのである。

此のスカートの縫ひ方を幅を總べて接ぎ合せて圓筒形になし、上部は腰紐で刺し縫になし、是れを着してから紐を引き締めて前で結び垂れた

第十二圖



スカート着用
のクイン
(古代エジプト)

ものと解して居る書もある。(Ancient Egyptian Assyrian and Persian Costume. 24頁参照) スカートの根本形式には、筒形に裁縫したものを穿くのと、長方形のものを巻くのと二型式がある。概して熱帯型としては長方形のもの、寒帯型としては筒形のものが用ひられて居る。故に此のエジプトの女子の裳も長方形と見る方が至當と考へられるのである。

第十三圖



スカート着用
の貴族の男子
(中王國時代)

(2) 第十三圖はスカートを着した貴族の男子であるが、神官にも同様の着用法をして居るものがある。是れは凡そ幅一米丈二五〇極の長方形の布を、後より巻き前にて幅を引き締めて結び垂らしたものであらうが、垂れる布の下の方が三角に尖るやうに布を美しく整へて居る。

(3) 第十四圖は神官であるが同じく長方形の布(凡そ幅一米丈三米)を、後から前へと巻き、前の結び目から大きく下の方で擴がるやうに布を結び垂れて居る。



スカート着用
の神官
(中王國時代)

(4) 此の他アケナテン一族の祭壇浮彫圖(テル・エル・アマルナ發見)の中の王は、スカートを前は低く腹部を露はし、後は腰に巻いて前で結び垂らして居る。新帝國時代のものである。(世界美術全集、第一卷六十九圖参照)

アメノホット四世と其の妃の像、此の王も同じスカートの着け方をなして居る。(世界美術全集第一卷八十四圖)

(5) 又丈一米、蹠廻し二五〇極位の筒形に縫つたスカートを穿き、其の

兩脇で幅の緩みを引き絞つて前に引き寄せて結び合せた着方もあつた。

(Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume. by M. G. Houston.

第十二圖参照)

(6) ロアッククロスの上に重ねて、羅のスカートを用ひた事も見られる。

(Textiles and Costumes 第五十五圖、五十六圖、七十三圖、七十七圖、

七十八圖参照)

スカートの前の垂飾

貴族の男子はスカートの前に帯から垂飾を下げた、是れは古王國時代末から始つたものらしく、材料は、黄青緑等の彩色で繪を畫いた革、麻に毛絲で刺繡したもの、メタルを付けた麻布等である。前に擧げたる第九圖のスカートも帯から此の垂飾を下げて居る。此の他次の圖に是れが見られる。

彩色したる圖を見るには(Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume. 圖版第九圖。)(Le Costume.) 第1頁第2頁)。

セテイ一世(世界美術全集、第一卷第八十七圖)。

此の帯から垂飾を下げると云ふ裝飾心理は、諸民族に見られるもので、我が國の上古時代に帯を前に結び垂れた事も、唐制模倣に據る綬、玉佩、其他を下げた事も、支那西域地方に又朝鮮にも種々なる佩物を見るのも是れである。而して此の帯に物を下げる事は一つは裝飾に據るのであり、一つは物を携帯するに便なる爲めとの二方面から行はれて居るのである。

カラジリス (Kalasiris)

貫頭衣ともチュニック型ともシミーズ型とも云ふべき衣服で、丈はネックから踵まであつた。古王國時代から男女に見られ、男子の一般服がロアン

クロスであるのに對して、是れは女子の一般服となつた。故に男子より女子の方が體を包む事が多かつたのである。是れには帯を締める時と締めぬ時とがある。

三種のカラジリス

(一) 單なる筒形の服で、蹴廻し一七〇極位で歩行に差支なき程度の細いもので、此の胸又はウエイスト線から上は、紐を付けて釣るすやうにした形である。(現代の婦人のスリッパに見る形)此の形が古王國時代から婦人の一般服となり、新王國時代まで引き続き用ひられた。

丈は一般に踵までであるが、少女や勞働に従事する者は膝までの丈のを着て居る。紐の付け方に、兩肩から垂直に附けたのと、中央へと斜に附けたのと、紐を一本にして一方の肩から反對側の胸へと斜に附けたのとがある。前出の第二圖マスタバ内壁浮彫の貴婦人と召使の像(第三王朝)を見ると、貴婦人も召使も少女も同じ紐釣りの此のカラジリスを着して居る。

用布は一般に白色の薄い麻布が用ひられた。第十五圖はクレオパトラの像と云はれて居るもので、(西紀前一七〇〇年の作)此の布の縞模様は畫いたものと見られて居る。此の縞のデザインは、前の中央に垂直に通した線が、身長をすらりと高く見せ、其の線から左右に斜めに下向きに出した線は、快いリズムをなし、又膝の邊から下にはスカートの如く堅の線を出し、其れが裾で擴げられて安定感を作り、上部では細く締つた感じを作る等、全體として非常に巧みなデザインである。是れを畫いた線と解釋せず、布の襷で作られたものと解しても又よいデザインである。此のまま現代のイブニングドレスに用ひてもよく、又上部を紐にせず

チュニック型にして、アフタヌーンドレスや、ストリートドレスに作るのも面白いものである。

第十五圖——ストラップ付きのカラジリス(新王國時代) 口繪第四頁參照

此の他に次の像に依て此のカラジリスが、種々の模様が附いた布で作られた事が見られる。

青銅のバケツの彫刻中の女神像(第十八王朝のもの、世界美術全集第一卷第九十五圖)。

ハトルの女神像(第十九王朝のもの、同書第八十七圖)。

紡織をする婦人の像(Textiles and Costume: 二十、二十二、二十三二十四圖)。

(二) 第十六圖に見る如き貫頭衣型で袖の無い、現今のシュミーズのやうな形もある。此の裁縫は着丈の二倍を取り、丈を二つ折にして折り山を肩山とし、其の山に一つの穴を頭を通す大きさに(凡そ半徑九纏位)明け、肩幅に合せて布の肩幅を切り、裾は歩行に不自由のない程度に(蹴廻し一七〇纏)擴げて、脇を斜に裁ち落したものである。これを腕を通す明きだけ(凡そ二〇纏)残して其の下の脇を縫ひ合す。

第十六圖——貫頭衣のカラジリス着用の奏樂女(新王國時代) 口繪第四頁參照

第十六圖は三人の奏樂女の像で、此の中の二人は透く羅のカラジリスを着して居る。

(三) 筒袖の貫頭衣型で、袖は短い場合が多いが長いものもある。

第十七圖は貴女タクシットの銅彫像(ブバステイス發見)で、是れは袖は細く長く手首までである。用布は羅で全體に刺繡で模様が表はされて居る。(是れは第二十六王朝の作で、ギリシヤの影響を受けた彫刻と見られて居る。)

第十七圖——長い筒袖のカラジリス着用の女子(新王國時代)

口繪第四頁參照

第十八圖



短袖のカラジリス着用の女子(中王國時代)(古代エジプト)

第十八圖は短袖のを着た樂人であるがやはり羅を用ひて居る。丸いネックの前に頭を通す爲めに明きが作られ上部を紐で結んで居る。是れは古王國時代から中王國時代にかけて見られるものである。

以上の着裝の姿の參考として Le Costume.

1、2、3頁參照。

裁縫、腕を覆ふ袖を作らうとする時、初歩の裁斷としては、身に用ひた布の幅の残りを其のまゝ腕に當てて、袖下を切り脇の幅を切り落し、キモノスリーブが作られるであらう。總べて衣服の製作の第一は、體に布を當て、裁斷する方法に據つたと見るのが適當である。

裁斷及び縫ひ方の參考は “Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume”, by Houston. “A. History of Costume”, by Carl Köhler. (但し後書の袖附の寸法は幅狭く着用せられず、前書のが適當である)。

以上の着用の姿を見ると裾口が狭く歩行に困難に思はれるが、材料が編みたる如きルーズな織物で、伸び易いものと想像せられる。

ネックレース (Necklace)

原始的服飾の一つで、細いものから幅廣く發達したのである。上流の男女に用ひられ、幅の廣いものは古王國時代から見られる。書物の中には是れをカラー又はケーブと稱して居るが、ネックレースと云ふ方が適當であ

る。石や硝子玉等を糸に連ねて一重又は二重に頸に巻いたり、又幅の広いものは玉の緒を編んだものもあり、又布に彩色したものもあつた。幅は頸元から肩先までであるのが多い。切れ目は後に置いたらしい。此の着装は前に挙げた第一、二、四、八、十二、十六圖等に見られる。

此の他になほ見られる資料を次に挙げる。アケナーテンの王女姉妹(エル・アマルナ宮殿壁画)、女神ハトルの像(テーベ)、マスタバ内壁画中の貴族男女、ラホテプト其の妃の像(カイロ博物館蔵)、愛の王者ヘンタター(フローレンス考古博物館)、以上世界美術全集第一巻。

色彩の見られる圖は Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume. 圖版第一圖、第二圖、第三圖、第四圖、第五圖、第六圖、第八圖、第十圖。

平面圖を示したもの、同書第十一 B 圖。Le Costume. 圖版第一、二、三、四頁。特に四頁の部分圖参照。

ケープ (Cape)

古王国時代から貴族の婦人に用ひられて居る。ネックレスから分れて發達したものと云はれやう。

裁断は、楕圓形で寸法は凡そ長い方の半徑が四五纏短い方が二〇纏位、其の廣き方を肩に當ると、肩から脇の近くまで被はれ、前後は其れより短く背と胸にバスト線あたりまでかゝる。前の中央は切れ目である。第十二圖のネックレスの下にかけたのが是である。又第十九圖の如く長方形のスカーフとも云ふべき形もある。是れは中王国時代から男子にも用ひられて居る。幅が頸元から脇位まであり(凡そ四五纏)、丈は両肩から膝位まであつて(凡そ一〇〇纏)、是れを前で結び合せて居る。是れ等のケープは

第十九圖



長方形のケープ着用の
男子 (古王国時代)
(古代エジプト)

スカートと共に用ひられる事が多い。

材料は白色の麻布の類で羅である。

此の肩に薄地の布を掛け垂れて装飾とする事は、多くの民族に又古今に見られるもので、東洋に於ても支那唐代の婦人に、又同じ流れで我が奈良朝時代の婦人に、盛に用ひられた領巾が是れであり、現今用ひるスカーフも是れである。

クローク (Cloak)

丈は肩から胸と肩から踵までとを加へた長さで、(凡そ一六〇纏)幅は體が包まれる大さ(一四〇纏位)の長方形の布で、是れを縦に背に掛け、肩から胸に及び脇の幅を前にと布を引き寄せ、両手は被はれながら其れを持ち、腰より下は前で幅を重ね合すのである。これは古王国時代から新王国時代まで貴族の男女に用ひられた。材料は白布が多い。

第二十圖のラホテプトの妃ネフェルト、第二十一圖セソトリス一世が、是れを着して居る。(是れ等は古王国時代のもの)

第二十圖——クローク着用の妃(古王国時代) 口繪第四頁参照

第二十一圖——クローク着用の王(古王国時代) 口繪第五頁参照

此の形で肩から布の上部の兩角を引き寄せて前にて結び合せ、腰にて幅を前に引き寄せてバンドを締める着装法もあつた。是れは第二十二圖の西紀前一二〇〇年頃の貴婦人の像に見られる。アメンホット四世の妃も同じ服装である。(世界美術全集第一巻八十四圖参照)第二十三圖は第二十二圖を寫生圖に改めた圖である。

又第二十四圖に示す如く下に筒形にしたスカートを穿き、其の兩脇の幅

第二十二圖

クローク着用の女子
(第十八王朝)

第二十三圖



第二十二圖の寫生圖

第二十四圖

スカートとクローク着用の女子
(新王國時代)
(古代エジプト)

の緩みを左右に取つて前に引き寄せて結び合せて置き、其の上に此のクロークを背に掛け、上部の兩角を肩から前へと引き寄せ、スカートの結び目に共に結び合せる着装法もあつた。是れは其の胸の中央に出来た結び目を中心として、肩に裾に脇にと放射的の襞が出来、美しいデザインでこれも現今婦人服に用ひられるものである。是れは西紀前一四五〇年頃の婦人に用ひられ、後のギリシャ、ローマにも見られる。

ロ - ブ (Robe)

是れは中王國時代から新王國時代にかけて着始められたやうに見られる衣服で、第二十五圖及び第二十六圖の寫生圖に示す如く、丈は肩より踵までの丈の二倍に取り(凡そ二八〇浬)、幅は殆ど両手を水平に舉げて手首に達する長さ(凡一二〇浬)で、此の布の丈の中央即ち肩山にネックの穴を開け、手を通す明きを残して脇を縫ひ合せたもので、頭を貫いて着た寛かな貫頭衣である。此の服は主として男子の樂人に用ひられたらしい。

帯を締める時と締めぬ時とがある。

第二十五圖——ローブ着用の男子 口繪第五頁参照

第二十六圖



寫生圖

此の寛かな貫頭衣は、熱帯型衣服の一特色で、ペルシャや南洋諸島、ブラジル、ペルー等の南米諸國に現在も用ひられて居る。材料は白色の麻布もあり、又薄紫地に七寶つなぎの模様を表したものも見える。

女子のローブ

女子の中には此のローブの脇を縫ひ合せず、單にネックの穴だけを開けたものを着し、腋下にて後の幅の端を左右ともそれぞれ前に引き寄せ、結び合せた着方もあつた。

第二十七圖及び第二十八圖の寫生圖が是れを示して居る。(古王國時代末のもの)又此の他ア=の夫人(世界美術全集第一卷第六圖)も此の装ひをなして居る。



寫生圖

第二十七圖——女子のローブ 口繪第五頁参照

帯を締めたローブ

第二十九圖、第三十圖寫生圖に示す如く、貴族男子は太い幅の布の帯を此のローブに締めて居る。其の着方は脇を縫ひ合せぬローブに、頭を通し、前布の上に後布の幅の餘分を引き寄せて重ね置き、同じ白布(幅七〇浬丈一八〇浬位)の帯を右脇から前に左へと少し斜めに下げて巻き、次にヒップに廻し右脇へ取り、又前に左へと少し上げて斜めに巻き、其所にてなほ巻き終りの丈を上方へと挟み込みて止める(古王國時代末のもの)。此の姿はア=の畫像(世界美術全集第一卷第

第二十九圖——帯を締めたローブを着した男子 口繪第四頁参照

第三十圖 六圖及び第八十三圖)に見られる。ア=は神に仕へた高官であつた。



寫生圖

又第三十一圖に見る如く此の帯を前にて結び目から長く垂らした着方もあつた(帯の丈二八〇極位)。是れは古王国から新王国時代の貴族になされ、材料は同じく白色の羅である。ラムセス二世の彫刻像(十九王朝のもの)、

其他十八、十九、二十王朝に於ける男子の像に多く見られる。然しこれを婦人も着用して居る。(Textiles and Costumes 六十三圖) 婦人の場合はスカートと同様に帯の位置が男子より高い。

第三十一圖——帯を結びたれたローブ(新王国時代) 口繪第五頁参照

ドレイバリー (Drapery)

垂れ掛けられた布をかく呼ぶ。衣服が一つの掛け布になつて居るもので、熱帯型衣服の一特色である。此の掛け方(装ひ方)、即ちドレイピングに種あつて、エジプトに於て非常に發達したものがあつた。

第一種ドレイバリー

西紀前一五五〇年の女子に見られる。着装した姿は第三十二圖及び寫生圖第三十三圖に示す。(Ancient Egyptian, Assyrian and Persian Costume. 圖版第十、第十六圖。Vom Lendenschurz zur Modetracht von Hans Müntzel 二十九頁婦人着用圖。Textiles and Costumes 五十七圖参照、後者は神官に着られて居る特殊なものである。)

裁斷は幅一一〇極、丈四五〇極の長方形。

第三十二圖——第一種ドレイバリー(新王国時代の初め) 口繪第六頁参照

第三十三圖

材料は白布が多く丈の両端に縁飾を付ける。



寫生圖

ドレイピング、ウエストに細い紐を一本假りに締めて置き、是れに布の一隅を左前脇のウエスト線に挟み、次に布の幅をスカート丈として下に垂らし、布の丈を採つて、其のまゝ後ろへスカートになるやうに巻き、右脇から前へと取り、前の中央にて三つ四つ寄せ襷を取り、

(歩きよい爲めである)紐に挟み置き、又布を後ろへ廻し、右脇に出し、其所より前へと巻く時は、布幅をたくし寄せて、胸から斜に、左腋下へと引き上げ、背を斜によぎつて、右肩に出し、其れより前に取つて左肩及び腕を覆ひて背に戻し、其れを左腋下に斜に下げて、前のウエスト線に取り、左ウエストの初めの一隅と結ぶ。左の腕に懸つた布の終りの結ばぬ方の一隅が背に三角形をなして垂れる。ウエストの結び目に出来た放射線の襷、前に寄せられた直立線の襷、肩から一方の腕へと懸つた斜の襷、總べての線が對照し、アシンメトリカルにて變化があり、而も放射線に據る統一があつて、藝術的に整つた巧妙なドレイピングである。現代のイブニング・ドレス等のデザインに利用するによき資料の一つである。

第二種ドレイバリー

第三十四圖で是れは西紀前一三〇〇年に見られる形である。

裁斷は幅一一〇極、丈三八〇極位の長方形。

ドレイピング、ウエストに細紐を假りに締めて置き、右脇のウエスト線に、布の丈の一隅を挟み置き、布幅をスカート丈として垂らし、布の

第三十四圖



第二種ドレイバリー（新王國時代の初め） 結ばれぬ方の一隅が、大きく三角形になつて両肩から垂れる。

大體にシンメトリーの形をなし、且つ右脇を中心として肩に腕にスカートに放射に近い線が流出し、全體が一つの快い線の諧調を作つて居る。肩より背に、三角のショールの懸る形は、後世も現代も諸民族に往往見られるデザインである。

第三種ドレイバリー

第三十五圖西紀前五五〇年の女子に見られるスタイルである。着裝の姿は、この他に木棺の彫刻中の四人並ぶ侍女（世界美術全集第一卷第九十一圖参照）、其他の女子の畫像にも多く見られる。



第三種ドレイバリー（新王國末期）

裁斷、幅一二〇匁、丈三六〇匁の長方形。
材料、白布が多く前記と同様に丈の兩端に縁飾りを附ける。
ドレイピング、細紐をウエストに假りに締め置き、布の一隅を前の左脇のウエスト線に挟み置き、幅をたくし寄せて布全體を前から斜に右肩へと掛け、後へ垂らし、幅の一方の一隅を取つて右腋下に廻して、初めの左脇の一隅と合せ置き、右肩から後へ釣り下げられて居る布の丈を、後をよぎら

せてウエスト線の左脇へと引き下げて来る。其れを前のウエストに廻し、此所でスカートとなして、初めの一隅と次の一隅との置かれて居る左前脇に廻し、其の時に前の中央で三つ四つスカートに寄せ襲を取り、細紐に挟み、次に右脇のウエストに廻し、左肩の上に後から投げ上げウエストの右脇へと胸をよぎつて引き下げ、此所で左の腕を覆ひ、ウエストにバンドを締める。其の結び目は右脇に置く。

是れは左腕に掛けられた布の縁飾りと、右前脇のウエストから裾まで直立線に下つた縁飾りとが、興味を添へ、且つアシンメトリカルな形に對してバランスを取る役目をなして居る。後ろには右左の脇から下方へと、三角形の襲がウエストから裾までリズムをなして作られ、美しく整つたデザインである。

第四種ドレイバリー

第三十六圖



第四種ドレイバリー（中王國時代）（古代エジプト）

西紀前一六〇〇年の女子に見られる。着裝した姿は第三十六圖である。

裁斷は、幅一三〇匁、丈二三〇匁の長方形で、前記と同様に丈の兩端に縁飾りを附ける。

ドレイピング、布一隅を右前脇のウエスト線に置き、布の幅をスカート丈として垂らし、布の丈をスカートになるやうに後へと巻き、左脇に取り、次にウエスト線の前に廻して、右腋下から後に廻し、左肩と腕の上を覆ひ、次に前に斜に懸けて、右脇の初めの一隅に結ぶ。是れで右腕は露出し、左肩から左腕が覆はれるのである。單純な線の對照にて整へられたデザインである。

以上の種々のドレイピングは、実際にして見て、始めて其の巧妙な事が了解されるのである。單なる長方形の布を體に巧みに纏ふ事に依て、自然に出来る美しい襞の線のリズム、興味の中心となる結び目の放射線、滑かに且つ變化のある輪廓線等デザインの勝れた此のドレイパリーは、永く朽ちぬ服飾美を持つて居る。ドレイパリーはエジプトに於ては新王國時代から發達し、ギリシャに影響し、ギリシャローマに於て藝術的に發達し、其の形と線の美しさは今なほイブニングドレス等のデザインのよき資料となつて居るのである。又此の同じ流れは印度に、延いては我が國の佛像に美しい衣紋として發展せられて居る。又ドレイパリーは寒帯型の體に合せたタイトスタイルの衣服とは異り、布の重み、硬軟、厚薄、光澤、弾力等の布味を、大に發揮するもので、布を眞に生かして使ふのはこれである。それで自然に地合が工夫され發達するのである。

此の他細い布を上體に卷いた服装や、革製らしい幅の太いベルトをウエストに巻く装ひもあつた。

髪風及び被物

男子は髪を刈り、普通は無帽であるがキャップを被る事もある。女子は大きなかつらを被る。(前出の諸圖参照)

履物

王も一般民衆も多く裸足であるが、熱帯地特有のサンダルを用ひるものもある。(第十一圖、第十二圖、第十九圖参照。Le Costume 第四圖参照)

兒童の服装

成年者は衣服を纏ひ、それが相當の發達をなした時代にては、熱帯地であるエジプトに於ては、子供は裸體であつた。是れは此の民族の古い時代が想像せられるものである。新帝國時代の初期で西紀前一五〇〇年の圖(世界美術全集第一卷第二圖参照)に上流人夫妻の狩獵のさまを畫いて居るが、其の夫はロアックロスを着し、妻はドレイパリーを肩から長く垂れかけて居る、其の娘はネックレースをつけたのみである。

又新帝國時代の初期西紀前一三七五年頃の帝王アケナーテンの王女の姉妹も(同書第四圖参照)耳飾りとネックレースと腕環の他、何等衣服を纏ふて居らぬ。同じくアケナーテンの一族の像の中の三人の女兒も裸體で表はされて居る。(同書第六九圖参照)

エジプトの衣服の概括

第一には腰紐、其他ネックレース、腕環、足環が用ひられ、次にロアックロス、是れが男子の一般の服装となり、貫頭衣が出来て其の上部を釣紐にしたのが女子の一般服となつた。ロアックロスの發展はスカートとなり、ケープ、クロークが付け加へられ、最後にドレイパリーが發達したと云ふ順序である。被物、サンダルも多少用ひられた。而して次第に身を被ふ事が多くなつて來たのである。

古代エチオピア (Ethiopia)

概ねエジプトと同様の服装であつたが、民族上の相違から特殊な點があり、文化の進むにつれアジア風の色彩が強くなつて居た。

初期 一般の服装は、麻、毛織、又は革製の簡単なロアックロスが用ひられ、やがてクローク風の布を纏ふものも着られた。貴族は男女ともエ

ジプトのカラジリスと同様の長衣を用いた。是れは長方形の布を筒形にして胸から踵まで覆ひ、上部は紐で肩に釣つた形が多く用ひられ、是れに帯を締める。

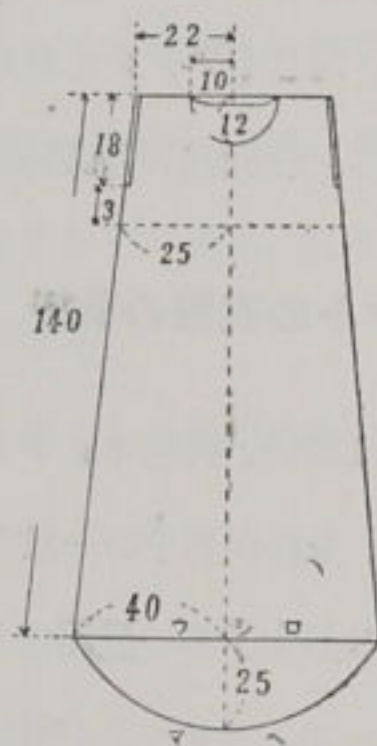
後期 ギャザーを取つた長衣、第三十七圖に見る如く、貴族の長方形の布の長衣は發達して貫頭衣となり、袖を付けるやうになつた。此の服の特色は第三十八圖の如く前丈を裾にて後裾より半圓形に長く裁ち、其れを

第三十七圖



ギャザーを取つた長衣
(エチオピア)

第三十八圖



平面圖

後と同じ裾になるやうに前の中央線でウエストから裾までギャザーして引き上げ、其の襞を抑へるのに幅六釐位の細長い布を、ウエスト線から裾まで縫ひ附けたのである。是れで中央の細布から左右に、シンメトリカルな斜の襞がリズムをなして出来、美しいデザインである。此の襞のデザインは現代も婦人のドレスに用ひられる。

第三十九圖



貴族婦人(新王國時代)
(エチオピア)

又此の第三十七圖の服はネックにてもギャザーをして居る。是れも顔を中心として興味が作られ、よいデザインの一つである。現代も女兒のドレスに用ひられて居る。

貴族の婦人は第三十九圖の如く、男子の服と同じデザインのスカートを穿き、左肩から右腋下へと斜に長い房の下つた紐を掛けた服装をして居る。

王は第二十九圖、第三十一圖のエジプトの貫頭衣のローブに太い帯を締めた服装であつた。是れは新王國時代の初期である。(Textiles and Costumes 第五十六、五十九、六十圖参照)

Textiles and Costumes 第五十六、五十九、六十圖参照)

古代西方亞細亞の諸民族

シリア、フェニキア、レトニュー、ヘブリュー、スメル、アッシリア、バビロニア、メディア、ペルシア、スキティア、バルティア、サルマティア、ダシヤ、イリリア、ヒッタイト。

西方亞細亞のチグリス河、ユーフラテス河の二つが一つになつて、ペルシア灣に入る。此の二河の流域の地方をメソポタミアと云ふ。スメル文化が此の下流地方に起り、上流地方にはアッカドの文化が開けたのである。此等の地方の文化はエジプトより古いものがあり、西紀前四〇〇〇年以前に遡り得るものがある。スメル人が衰へて、古バビロニア王國が興り(西紀前三八〇〇年)、是れが衰へて、アッシリアが榮へた。アッシリアはメソポタミアの北部を占め、バビロニアは南部を占めて居た。西紀前一五〇〇

年に新バビロニアはエジプトに侵略せられたが、アッシリアは獨立を保ち、西紀前一三〇〇年頃にエジプトの勢力が衰へた時、バビロニアの地方も併合し、アッシリアの第三王朝の時は西南のシリアをも征服し、エジプトをも攻め、又第四王朝のアッシュルパニバル王は、東はメディア、西南はエジプト地方、北方は歐洲大陸に接するまで、國勢を擴張した。メディアは西紀前二〇〇〇年前後に裏海の地方を占めて居つた。

ベルシヤはメソポタミアの東にあるイラン高原の南部(ベルシヤ)と西北部(メディア)に土着して居た。是れは西紀前二〇七〇年の頃で、エジプトの中王國時代の初期である。後ち勢力を得てアッシリアの衰へたるに乗じ、西紀前六〇〇年に大ベルシヤ國をなした。其の黄金時代のダリウス王は地中海にまで手を伸し、ギリシヤのなほ微力の時であつた爲め、是れを敗つてアテネの町を取つた。然し後ちギリシヤの海軍に敗れ、アレキサンダー大帝の遠征に滅された。(西紀前四世紀)

小亞細亞の沿岸に榮へたフェニキアの文化は、ギリシヤ文化に傳へるものが相當にあつた。

又黒海の地方に住んだスキティア、バルティア、サルマティア、ダシア、イリリア等の古民族の文化は、東洋西洋の文化に流入するものがある。

シ リ ア (Syria)

アーム族

初期 西紀前二三〇〇年以後五〇〇年間の服装は、一般の男子にはエジプトと同様のロアンクロスが用ひられ、其の他に第四十圖に見る如き長い袈裟式のクロークが男女に着られた。是れは長方形の布で幅は體の前後が包まる位、丈は肩から踵まで、丈の上方の一隅が細長く伸びて居

第四十圖



クローク着用の男女
(西紀前 20 世紀) (シリア) つた美しいものがあつた(衣服の模様は、衣服の形が簡單で布を平にして掛けるものに發達する、是れがアジアの南部の地方の持つ一特色である)又布の周圍には多く縁取りがなされて居る。普通に用ひられたのは、白地に緑、藍、赤の縞布であつた。

り、其の伸びた所を一方の肩に當て、反對の腋下へと斜に幅を巻き、後ろに廻して一方の角と肩にて結び止める。男子の方が女子より丈が少し短く膝の下位までである。

この服装は後に記するヒッティトにも用ひられて居るもので、原始的な服装である。

用布は毛織、麻、革等で、種々の模様

第四十一圖 後期 西紀前一八〇〇年以後。



クローク着用の男子
(西紀前 17 世紀)
(シリア)

この衣服を見るにはエジプトの新王國時代の繪畫が資料である。初期から後期まで五〇〇年を経て居るが、大差のない衣服を着て居る。

婦人の平常着は從來と同じで、長方形の布を袈裟風に纏ふ服のみである。第四十一圖に見る如く、男子はロアンクロスの上に、クロークを着した。此のクロークは、初期のものとは裁斷が多少異り、上部よりも裾に幅を廣く裁ち、肩から腕下に斜に懸ける所を丸く刎り落し、肩に結び合せる爲めの紐を附けた。

チェリ族 シリアの中央部を占めて居た。

アーム族と大差のない服装である。第四十二圖の如きクローク一つで

第四十二圖



クローク着用の男子(シリア)

あつた。其の裁断は長方形(幅一一〇極、丈一三〇極位)の布の幅に腕を通す穴の切り込みを一つ入れ、上部を前後縫ひ合せ是れを一方の腋下から肩へと懸け、胸の邊を紐で結び合せる。是れに大きな長方形(幅身と同じ、丈四〇極位)のカラーを付ける。此の服にも美しい模様の布が用ひられて居る。布地も薄いものを使つた。

フエニキア (Phoenicia)

初期 一般男子はロアングロスのみ、上流の男子は、短袖の丈の短いシ

第四十三圖



ロアングロス着用男子(フェニキア)

ャツを加へて着した。此のロアングロスは第四十三圖の如く、長方形の布を腰に一重廻して、前の中央にて左右を突き合せ、又は少し重ね、其の下部を丸く切り落したのである。其の中央にエジプトと同様の垂飾を附けたのも用ひられた。此の垂飾には特有の刺繍模様などが見られ、上部に締める帯にも特有の装飾がある。又エジプトと同様のネツクレースも附けた。

後期 後ちには此の他に、二つの上着が用ひられた。是れはロアングロスやシャツの上に重ねて着られたのである。

一つは第四十四圖に示す寛かな貫頭衣で、エジプトのカラジリスと同じで、袖は肘まであり、身丈は踵までである。全體にブリートを寄せた布が用ひられて居る。

他の一つは第四十五圖に示す服で、貫頭衣の上に懸けられた、ドレイ

第四十四圖



貫頭衣 (フェニキア)

第四十五圖



袈裟式衣 (フェニキア)

パリーである。長方形(幅一一〇極、丈二二〇極位)の布の一隅を前から後へと左肩に掛けて置き、次に布の丈を右腋下から後に斜に廻して、左肩に後から前にと打ち掛けたのである。此所にて布の端が斜になり、襷をなすので端が、ジクザックの線を作る。此の線は後にギリシャ人、ローマ人に非常に好まれ、其の整へ方が巧に工夫された。今も此の線は

ドレスの一部分の装飾にドレイパリーやラッフルにして用ひられて居る。此の服装はローマのトガに相通するものである。

第四十六圖



婦人服 (フェニキア)

(A History of Costume 第二十九、三十圖参照)

婦人は第四十六圖の如く下に細い手首までの袖のカラジリスと同じ形のもを着して居るが、其の身幅の緩みを兩脇にて、シンメトリカルになるやうに三、四本の襷に作つて居る。其の上に貫頭衣の裾の短い、腰までの丈の上衣を着し、其の上に細い帯を締め、其の結び餘りを前に長く垂らして居る。

右の他に圓形のケーブと半圓形のクロークも用ひられた。

レトニュー (Retennu)

シリア人よりも體を多く包む衣服が用ひられた。男子服に三種あつた。

(1) 腰布型 第四十七圖 長方形の布を腰に一重巻き、前で左右重ね丈は腰から腓までである。裾の一隅を多くは丸く切り上げ、上部をバンドで締めて居る。是れに圓形のケーブを着ける事もある。此のケーブは直徑六〇極位で、ネックの穴を開ける時に、中央より偏せて圓周より五極

入つた所になす、其の幅の狭い所に切れ目を置き、是れを左肩に當て右肩には幅の最も廣い所を當て、着す。

此の服の用布には美しい模様が見られる。

(2) 螺旋状の服 第四十八圖の服装である。是れは幅七〇纏、丈四〇〇纏の長方形の布の周圍に縁飾りを附けたものを、第一に布の端をスカートになるやうに左前脇に當て、それより後に廻

し、前に取つて一重巻きとなす。次に次第に丈を引き上げながら、體に第二回目を巻き、次に今一度即ち第三回目を巻く時は胸にかゝる。なほ第四回目は右肩から前に左肩にと巻き、巻き終りを背で斜めにウエスト線に置き、ウエストバンドを其の上に締める。是

も現今の婦人服に用ひられるデザインである。用布は模様が用ひられた。

(3) タイトスタイルの長衣、第四十九圖の服で上流の人の武裝に用ひられたらしく、丈は踵まであり、裾には前の中央と脇とに房を附けて居る。西紀前一五〇〇頃に見られる。用布は革であるらしい。

第四十七圖



ケープと腰布型の衣服(レトニュー)

第四十八圖



螺旋状の服 (レトニュー)

第四十九圖



タイトスタイルの長衣 (レトニュー)

タイトスタイルの衣服の原始的裁斷と發達 第四十九圖の服を見ると、肩、袖下、脇を前後縫ひ合せた縫ひ目が見える。着用の爲に前の中央を全部切り開け、ネック、前明、裾等の端及び周圍の縫目に縁取りをなして居る。縁取をせぬものもある。此の裁斷の仕方を此の縫目の位置から想像するのに、前記15頁筒袖の貫頭衣と同様に布を體の前後にそれぞれ打ち掛け、體の輪廓の通りに切つたものであらう。是れは衣服の原始的裁斷法で、着用者の體に布を掛けて裁つのでドレイピング(Draping)と稱して居る。(着用者の代りに、ドレッシングスタンドに掛けてなすのでスタンドカティングとも呼ぶ)、一つの形の衣服を作るのに此の方法を繰り返してなす事に依つて裁斷の平面の形を記憶し、直接布を平面にして目分量で裁つ方法即ちフリーハンドカティングが行はれる。なほ此の形が普遍的に用ひられるやうになつて平面圖の製圖法が考へ出される。以上が裁斷の原始と發達の順序である。而してドレイピングは原始的裁斷法であると共に、新しい衣服の創作方法である。故に古今を通じて常に此の方法は用ひられるのである。

婦人服西紀前一五〇〇年以後は、シリア及びレトニューの婦人に、第五

第五十圖



婦人服 (レトニュー)

十圖に見るが如き三段のフラウンス付きのスカートと、ウエストに帯を締めて用ひた。此の上に、楕圓形のケープを掛けた。是れがスカートの水平線と重複して快いリズムをなす。フラウンス(Flounce)にもケープにも周圍に縁取りを附けて、其の線を一層強調したのもあつた。此のデザインは其後歐洲諸國で女兒婦人服に盛に用ひられ、現代も見られるものである。

一般男子服 下級の人達は當時なほロアソクロスのみで、其の丈は膝まで、裾の中央と脇とに房を下げて裝飾したのもあり、上部はウエイ

トバンドで締める。

是等の材料は、毛織に刺繍したり、又タベストリー（綴織）で幾何學模様を、青赤黒白等で表はしたのも見られる。

ヘブリュー (Hebrew)

初期 西紀前一〇〇〇年。

貫頭衣とクロークが着られた。男子の下着は貫頭衣で、丈は踵まであり、袖は短いのも長いのもあつた。クロークは長方形で、右脇から左肩へと斜に懸けたり、又背から頭へも被つたりした。其の四隅には房が付く。貫頭衣は二枚重ねて着る事もあつた。肌着には麻布上には毛織が用ひられた。

ダビッドの時代からは、アッシリア人フェニキア人の影響で右の衣服に美しい模様タベストリーや其の他の布が用ひられた。

第五十一圖



貫頭衣の上衣 (西紀前 5 世紀) 羽織型の上衣 (ヘブリュー)

帯は獨特に發達し、ロアソックスや下着に締められ、初めは革製であつたが、後ちには金糸を附けたり寶石入のメダルを附けたものがあつた。

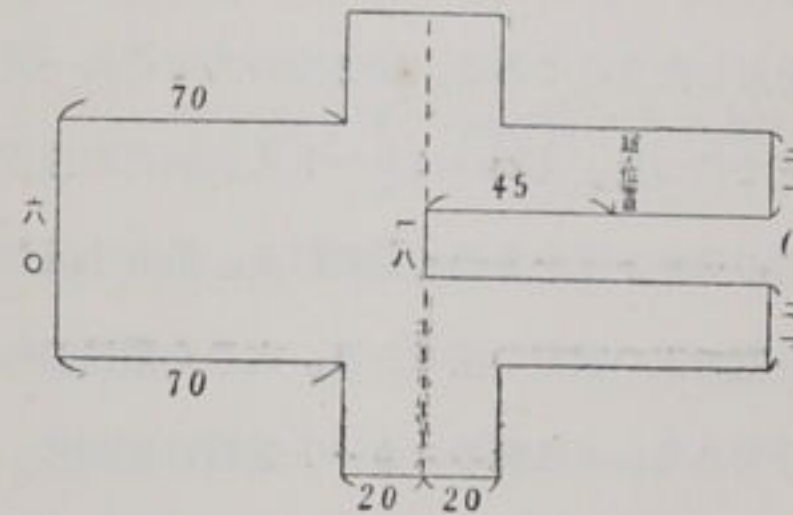
後期 第五十一圖に示す如く異なる形の上衣が二種着られ始めた。

第五十一圖の左方は貫頭衣で長方形（幅九〇、丈

二〇〇(幅位)の布を、丈二つ折りにして肩山となし、頭を通す穴を開け、脇は縫ひ合せず、裾の四隅に房をつけ、其の周圍には縁飾りを附けた。裾の角は圓く切る事もあつた。此の服はアッシリア、又はバビロニアで作り初めたものらしく、高級の僧も用ひ、後ちには房が大きくなり、紫色が宗教家を表はすものとなつた。

第五十一圖の右圖はキモノスリーブの羽織型で、身から續けて筒袖を切り、前の中央は羽織のやうに切り取つたもので、袖下と脇とを前後縫

第五十二圖



ひ合せ、前明きのウエスト線の邊にて紐を附けて左右を止める。此の服の周圍は縁取をなし、裾の前の角に房を付ける。第五十二圖は第五十一圖の右方のクロークの裁斷圖である。

スメル (Sumer)

メソポタミアに於けるスメルの文化は、エジプトより古く、其の勝れた文化はエジプト文化に影響するものが相當にあつた。

前期 先史時代の衣服はエジプトと同様である。

腰紐 第五十三圖に見る如く裸體の腰に紐を、一重二重三重など巻くのみのである。此の腰紐の結び餘りや木の葉等を垂飾として、腰紐から下げる事が行はれ初めた。次にはこの垂飾を布や皮で作られた。

第五十三圖

腰紐、掛布 (エジプト王朝以前)
(スメル)

スカート 第五十四圖に見るスカートで男女共に用ひられた。是れは腰紐から、スメル獨特の發達をなしたものである。腓までの丈で裾に一段房を付ける。是れは布又は皮で作つた。又此のスカート丈が胸高の位置から踵まであつて、五、六段の房を下げたものも見られる。第五十五圖はウル、ニナから發見された額で王の家族の像である。大きく表はされたのは王で小さい四人は王子である。王は此のスカートを着けて居る。

第五十五圖 — 數段の房付きスカート(西紀前 30 世紀) 口繪第六頁參照

掛け布 前記のスカートを着けた上に、房の附いた紐を右脇から左肩へと斜に掛けるものも行はれた。第五十三圖の右端の人物に見られる。是れも革製で毛皮も用ひられたらしい貴族の服装である。

後期 後期には前期の重い多くの房の附いたスカートは用ひられなくなつた。

マントル 第五十六圖に示すものである。長方形の幅一二〇寸、丈二二〇寸位の布の周圍に房を附けたものを、左脇のウエスト線に丈の端を置き、布幅をスカート丈として、前へと巻き次に後に廻して左脇に取り、其れより前から右肩へと斜めに引き上げ、右肩から後へ掛け、これより

第五十四圖

房付きスカート
(スメル)

第五十六圖



マントル(スメル)

れた。

以上のスカートとマントルとがスメル特有の衣服である。

アッシリア (Assyria) とバビロニア (Babylonia)

此の兩國は大體同様の服装であつた。

一般の服装

貫頭衣で短袖がつき、エジプトのカラジリスに似て居る。男女とも下層

第五十七圖

貫頭衣 (左貴族、右土隸)
(アッシリア)

の人達は是れだけを着し、是れに帯を締める時と、締めぬ時とがある。

アッシリアの黄金時代に至てもなほ奴隸は此の服装であつた。第五十七圖の右方が是れである。

貴族の服装

第五十八圖はバビロニアの西紀前二二〇〇年の王(立てる人)と神(坐せる人)を表はした像である。是れに見る如く、初期の王には、スメル人と同

背に斜めにかけて左脇の初めの布の端に結び合わせる。此の上前のスカート裾の角は、直角になす時と丸く落す時とがある。此の服装は男子にも女子にも宮廷に於て用ひら

様に、五六段房を重ねたスカートと、其れに續けて一方の肩へと巻き上げた房付きの掛布とが着られた。又同じくスメル人が着たマントルで、長方形の布を腰に巻き、一方の肩へと上部は斜に掛けた服装も用いた。

第五十八圖——西紀前 22 世紀 口繪第六頁参照

其後バビロニア、アッシリアに廣く行はれた貴族の服装は、第五十七圖の左方で一般の服装と形は大體に同じで、貫頭衣であるが、丈は踵まであり、短袖で裾全體に房を付けて居る。多くの場合是れに帯を締める。其の帯は丈の兩端に房が付けられて居る。

第五十九圖は西紀前七〇〇年頃の彫刻像に見られる王と重臣の姿である。是れは兩方ともに細い肱まである筒袖の附いた、身丈は踵まである貫頭衣で、裾には房を付けて居る。是れに帯を締め、後ろにウエストから踵まで垂れる紐飾りを付けて居る。王は三角形の頂から長い紐の下つた帽を被り、沓を穿く、他は重臣と同じ服装である。

第五十九圖——裾に房の附いた貫頭衣(西紀前7世紀) 口繪第七頁参照

第六十圖



掛け布と飾紐
(西紀前7世紀)
(アッシリア)

又第六十圖に見る如く、貴族は儀式には前記の貫頭衣の上に、前記の長い房の附いた紐様の掛布を左脇に當て、後から前へと一重巻き、次に右脇から前につて左肩へと斜に掛けて後へ垂らす。是れは西紀前七〇〇年の頃のもので大臣の服装に見られる。右の房の短いものは、宮廷の侍臣に用ひられた。

小さいエプロン型の腰布 第六十一圖に見る如く、アッシュルナシル王の時代(西紀前八五〇年)に王も重臣も、前記の長い貫頭衣の上に腰に、五〇纏

第六十一圖



エプロン型
腰布と飾紐
(アッシリア)

四角位の布で三方に房を付けたものを、上部は帯の下に入れて垂れ掛けて居る。是れには特有の龜甲形の模様立派な織物が用ひられた。

飾り紐 是れは第六十、六十一圖の人々が着けて居るやうにネックに、ウエストバンドに、髮帯(Fillet 頭に鉢巻する紐)に、太刀に、襷がけに、此の飾り紐を結び垂れる。紐の先には房が下がつて居る。是れも此の地方特有の威儀的裝飾物である。

クローク 西紀前八五〇年頃のものに見られる服装で、第六十二圖が是れである。前記の短袖貫頭衣の膝までの丈のものを着し、是れに前記のエプロン形の腰布を前に纏ひ、其の上に肩から踵までの長さの布(幅一〇〇纏、丈一六〇纏位)を、右脇から左肩にと斜に掛けて前後を肩で結び合せて居る。左脇は開く、是れは美しい幾何的模様の布を用ひ、周囲には房を付けて居る。是れも宮廷に用ひられた服装である。

第六十二圖——クローク(西紀前9世紀) 口繪第七頁参照

貫頭衣のクローク 第六十三圖の、アッシュルナシル王の妃が、踵まである貫頭衣の上には是れを着て居る。此のクロークは丈は肩山から膝の下まで、幅は兩脇に掛る位の(幅六五纏、丈一〇〇纏位二枚)長方形の布を二枚取り、肩山にネックの穴を開け、裾の四ヶ所の角を丸く切り落したもので、肩を前後縫ひ合せるのみで、脇は開けて置く。周囲には房飾りを付ける。是れに頭を通して打ち掛けて着したのである。(Textiles and Costume, 及び Ancient Assyrian Costume 兩書ともに是れを大きなショールと解して居る)

第六十三圖——クローク(西紀前9世紀) 口繪第六頁参照

材料は他と同様に美しい模様の刺繡の布や織物が用ひられた。

一般の貴婦人も此の服装をして居つた。

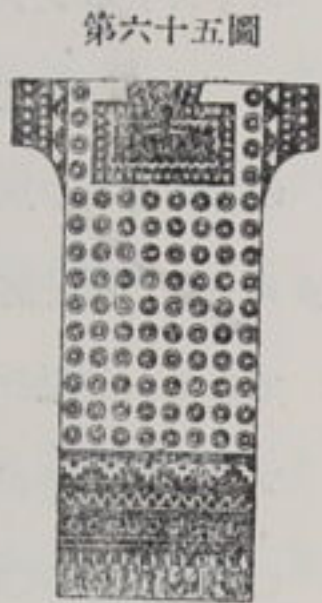
第六十四圖



宮廷男子服
アッシリア

又宮廷の男子も同様のクロークを着けて居る。是れは第六十四圖に見られる。

婦人の貫頭衣 一般の貴婦人は第六十五圖に見るやうな美しい模様筒袖の貫頭衣を着した。是れはアッシュルナジルバル王妃のものである。此の上に細い帯を締める。



第六十五圖

貫頭衣

螺旋状の衣服 第六十六圖は王と神官であるが此の服装をして居る。第六十七圖は王の服装の寫生圖である。

此の布は第六十八圖に示す如く、幅一五〇糎丈三

第六十六圖



螺旋状の衣服 (西紀前9世紀)
(アッシリア)

第六十七圖



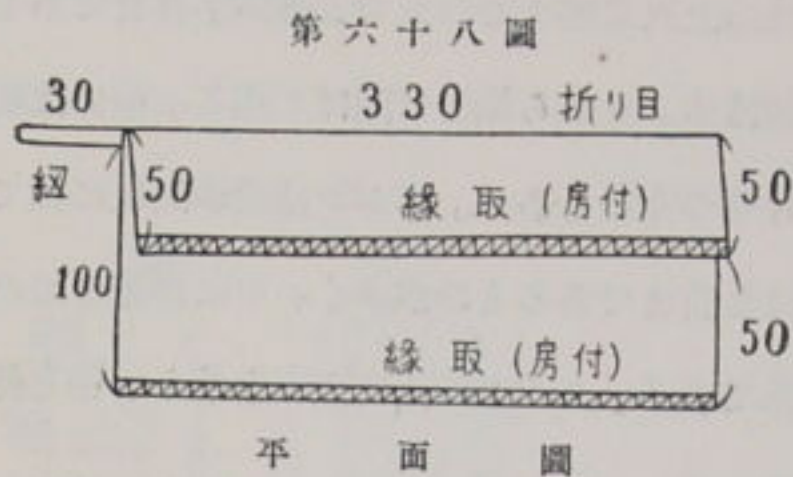
寫生圖

三〇糎位の長方形の布で、幅の両端に縁飾りを付けて居る。是れを幅五〇糎表の方に折り返し、其の折り目の一方に二〇糎の長さの紐を縫ひ付けて置く。

着法は、第六十七圖に示す如く、先づ紐を右肩から前に取

つて置き、布の折り目を後ネックに當て左肩に掛け、左腕を包み、其れより腰に前から右脇へと巻き、

後ろに廻して左脇に布丈の餘りを垂らし、ウエストに紐を締める。其の紐に初めの紐を結び付けて置く。此のウエストバンドを締める事で、左腕に巻いた布も腰に巻いた布の折り目もしつかり止まるのである。(Ancient Agyptian, Assyrian and Persian Costume. 六十二頁に據る。A History of Costume には是れを三角形の布になして、體に巻くやうに書かれて居る)



平面圖

第六十八圖

後ろに廻して左脇に布丈の餘りを垂らし、ウエストに紐を締める。其の紐に初めの紐を結び付けて置く。此のウエストバンドを締める事で、左腕に巻いた布も腰に巻いた布の折り目もしつかり止まるのである。(Ancient Agyptian, Assyrian and Persian Costume. 六十二頁に據る。A History of Costume には是れを三角形の布になして、體に巻くやうに書かれて居る)

材料 此のアッシリア地方の特色として、特に幾何的模様を麻布に刺繡で出したものや、タペストリー等の華麗のものが、用ひられた。第六十九圖はアッシュルナジルバル王の狩獵の圖で、王も従者も共に美しい模様の衣服を纏ふて居る。

第六十九圖——華麗な模様の衣服 (世紀前9世紀) 口繪第八頁参照

被物 第六十四圖の帽はティアラ (Tiara) と稱し、此の地方特有の帽で王や貴族に用ひられた。材料は厚い布やフェルトで作られた。

總じてアッシリア、バビロニアの衣服の特色は、房飾の多い事と、美しい模様の材料とである。形は貫頭衣と、其れに威儀的服飾として、袈裟式の掛け布や、貫頭衣のクロークが用ひられた。

メディア (Medes) とペルシア (Persia)

温度の低い高原地であつたから、ペルシアの服は前記の諸民族と異り、寒帯型に近い服装であつた。

ペルシアの短い貫頭衣とズボン 第六十九圖(西紀前四〇〇年)、是れがペ

ルシヤの一般服であつた。此の上衣は腰までの丈で、細い手首まである袖を別に裁つて縫ひつけ、前はネックから裾まで開けて居る。中には前を全部開けず頭の通る穴だけ切つたのもある。ズボンは此の民族に依て初めて見られるもので、丈は足首まであるものが多く、中には膝までのものもあつた。幅は廣く寛かである。ズボンの上に上衣を着し、帯を締める。

第六十九圖——貫頭衣とズボン(世紀前4世紀) 口繪第七頁参照

材料 毛織が用ひられた。

被物と履物 革製の浅い沓又は深い靴を穿き、頸に懸けるストラップ(Strap)の附いた帽子を被る。

メディアの寛かな衣服 メディアの一般の衣服はベルシヤと異り、寛かな長衣であつた(是れは又ベルシヤの王の儀式服と同じ形である)。第七十圖に見る衣服で、丈は肩から踵までの二倍、幅は手首から手首まである長方形(凡そ幅一五〇糎、丈三〇〇糎)の布を、丈二つ折りになし、折り山に頭を通す穴を明け、脇は上部を凡そ六〇糎位袖口として残して其の下を縫ひ合せたもので、是れを着る時に身幅の廣い分を、兩脇にてボックスブリーツに折り疊みて、ウエストに帯を締めるのである。其の爲めに、袖下と脇とに美しい皺が見られる。此の圖は西紀前五〇〇年のもので、ベルシヤのダリウス王がメディアの服を着した圖と解されて居る。一般人と異り、王のは模様のある布が用ひられ、二枚重ねて着して居る。

第七十圖——メディアの寛衣 口繪第七頁参照

衣紋 平面的な寛かな衣服に、着用上美しい皺と形とを作り出す事を我國にて古來衣紋と稱し深く工夫せられて居る。寛衣の特色であり、其の發達の一側面である。是れはドレイピングと共に此の後ちギリシヤローマ

に非常に發達した。

被物 頭から頸まで被り顔のみを出した頭巾が一般に用ひられた。

第七十一圖



ドレイバリー 寫生圖
(西紀前6世紀) (メディア)

神官のドレイバリー 第七十一圖の服装

である。右方は西紀前六世紀のもので左方は其の寫生圖である。

此の布は長方形で幅は一〇〇糎位、丈は一七〇糎位で、此の四隅には小さい房が附けられて居る。此の布の丈の中央を體の右腋に當て前後とも斜に左肩へと引き上げ、後を先に肩に掛け、

次に前を其の上に打ち掛けたのである。

ベルシヤの婦人服 異子の一般服と大差がなく、袖の附いた貫頭衣であるが、男子より丈が少し長く、幅も寛かであり、前は男子と異り、頭の通るだけに胸の明きを開けて居る。ズボンは當時の遺物には見られぬが、其の後の西紀五世紀のベルシヤの王妃に着けられて居るので、古代の此の當時も用ひられたであらうと想像せられる。全體にメディアの影響を受けて次第に寛かな衣服になつて行つた。

ベルシヤの袖を通さぬ外套 第七十二圖西紀前六世紀に見られる服装で、下にはズボンを穿き、其の上に貫頭衣を着し細い帯を締め、其の上に袖を通さずに外套を着して居る。是れはアレキサンダー石棺浮彫中戰場にても着して居るのが見られる。此の外套はベルシヤ特有のもので、其後支那西域地方に廣く行はれ、支那の本國に於ても胡服と稱して唐代に着られて居る。(原田淑人氏著「支那唐代の服飾」の七六頁、同氏著「西域發見の繪畫に見たる服飾の研究」の七六頁参照)

第七十二圖



(ペルシャ)

是れは此の地の文化に勝れたものがあつた爲めに、一般の文化と共に其の衣服も取り入れられたのである。

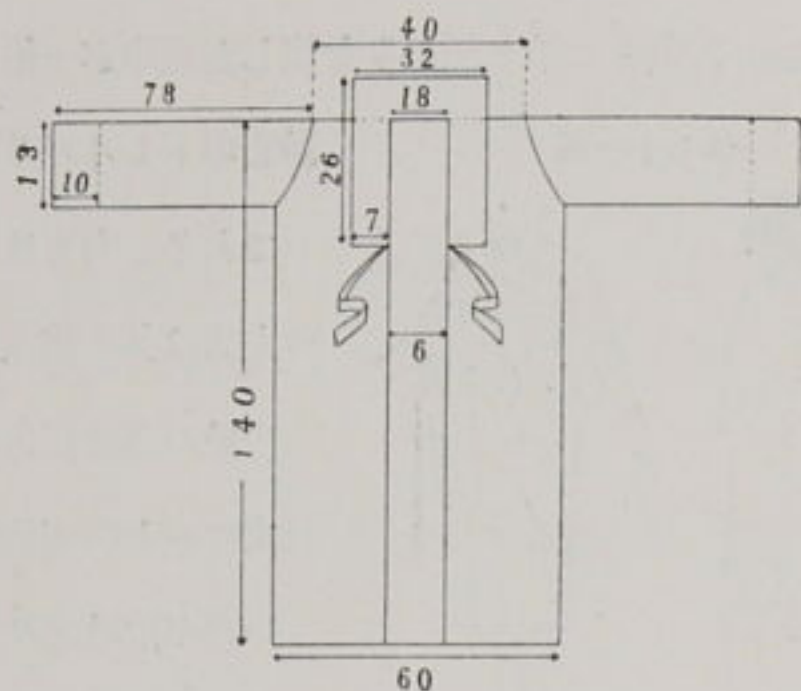
此の袖に手を通さずゆらゆら下げて着する事は、其の着装心理に悠然たる気分が得られるのではなからうか。其後の歐洲にも見られる事であり、我が國に於ても近世腰巻とて貴婦人が小袖を脱いで腰に纏つたものがあつた、相通する處がある。

スキティア (Scythia)

黒海の北方及び其の周圍に住んだトルコ民族で、支那にて北胡又は胡族と呼ばれた。其の文化に特有のものがあつて、其れが東洋に西洋に廣く影響を與へたのである。西紀前五世紀頃が全盛時代で、西紀前一、二世紀に衰へた。服装は寒帯型である。

太いズボンと左衽の短衣 第七十四圖に見る如く、短衣は腰までの丈で、袖は手首まで筒袖で、前を左衽に合せて着し、帯を締める。此の圖は西紀七〇〇年のものである。

第七十三圖



第七十四圖



左衽の短衣と太袴 (スキティア)

と云はれたのは胡服の風が左衽であつたからである。我が上古の埴輪土偶に見る衣は、此の流れである。我が國に於ても奈良時代以後是れは次第に用ひられなくなつたが、正倉院御物中には左衽の短衣が遺されて居る。(昭和七年四月奈良博物館の展覧會に出品せらる)。

太いズボン 是れも支那にて胡服の太袴と呼ばれた特色あるもので、我が埴輪土偶の褌が是れである。

長靴 第七十四圖に見る長靴は、足首の所にバンドを付け、此れを引き締めて尾錠で止めて居る。是れも支那にて長靴靴(原田淑人氏著「支那唐代の服飾」第二十六頁、七十六頁に據る)と呼ばれたもので、支那にも行はれ、又我が國にも多少用ひられた事があつたらしい。其れは正倉院御物中に長い襪が藏せられて居るので推察せられる。(昭和七年四月奈良博物館に展覧せられる) 同じく此の形の短いものも支那で短靴靴と呼ばれて用ひられ、是れが我が國にては靴と呼ばれ、奈良朝時代より現今まで引きつゞき束帯に用ひられて居る。

被物 第七十四圖中に見る如く帽子は三角形のものが用ひられて居り、是

材料は革が多く、羊毛の織物やフェルトも使はれた。

此の左衽の筒袖の短衣は、此の民族特有の衣服で、支那にて胡服と呼ばれたもので、(孔夫子が論語に「微管仲吾左衽」

れはフリジア人の着した帽子と云はれて居る。

以上の如く我が服装中に此のスキティアの服装が流れ入つて居る事は、深い興味のある事である。(「漢代に行はれたる胡服の源流に就て」石田幹之助氏の講演に據る)

パ ル テ ィ ア (Parthia)

スキティアに次いで黒海地方に住んだ民族で、騎馬に巧みであつた。其の服装は、上衣はメディア、ズボンはベルシヤ、スキティアと大差のないものであつた。

手に餘る長い筒袖の衣

第七十五圖に見る如く上衣は頭の通る大きさの穴を開け、着して頸に合ふやうに紐を通して縮めたもの、又は前を裾まで開けたものもある。丈は長く膝まであつて、其の上に帯を締める時に、丈をたくし上げて着た。其の袖は長く手より餘つて垂れて居る。此の手より長い筒袖は、支那の

唐代に移入して男女間に盛に流行し(原田淑人氏著「支那唐代の服装」参照)、延いて我が奈良朝時代の上流人の着した襖は同じく袖の長いものであつた。彼の萬葉集の中の袖振るといふ語は、此の手に餘る長い袖を振る事を



長い筒袖の衣服 (パルティア)

第七十五圖

指して居るのである(萬葉集参照)。上衣は數枚重ねて着る事もあつた。括袴 ズボンは細いのもあるが、太いのは足首で括り縮めて居る。是れが我が國の飛鳥朝奈良朝時代に括緒袴と云はれ、後ち平安朝時代には指貫となつたものの、源流と考へられる。括袴は寒帯型のものである。

被物 スキティアと同様で三角形と頭巾形が見られる。婦人服 第七十六圖に見る如く、男子の上衣より丈が長く、薄い布が用ひられた。上流人はリボンの装布の豊富な装飾が付き同じく細い長い袖であつた。



第七十六圖
貴婦人の服装 (パルティア)

サルマティア、ダシア、イリリア (Sarmathia, Dacia, Illyria)

サルマティアは、スキティアに代つて勢力を得たが文化には大差がない。ダシア及びイリリアは黒海の東ルーマニア地方に住むサルマティアと同時代

の民族で、大體に同様の服装であるが、多少の地方的特色があつた。

サルマティアの上衣は第七十五圖のパルティアと同じ形で、上衣に重ねて着る下衣は上衣よりも袖丈身丈を長くした。

婦人も騎馬を巧みにし、男子と同じ服装であつた。



a. b. ダシアの服 c. イリリアの服

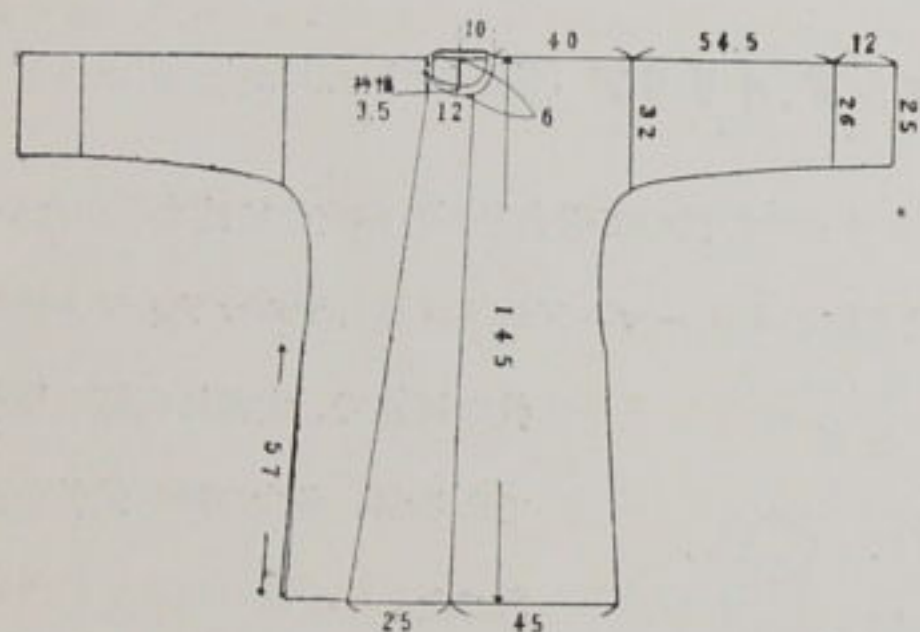
ダシアン、イリリアンの服装

は第七十七圖に示す如くで、サルマティアンと同様であつた。是れに半圓

形（凡そ半径一〇〇輻位）で丈が膝まであるケープが用ひられた。帽子は同じくフリジアン帽である。

闕腋袍 上衣の中に、丈が膝位まであつて、腰から下の脇を縫ひ合せず明けたものが見える。是れは其の後西域地方に廣く用ひられ、支那に於ても胡服の闕腋袍と呼び廣く着用せられた。（原田淑人氏著「支那唐代の服飾」、「西域發見の繪畫に見たる服飾の研究」参照）延いて我が國に傳つては奈良朝時代の武官や一般官吏に用ひられ（正倉院御物中に數十枚あり）。平安朝以來は闕腋袍と呼び武官の袍として、今日なほ束帯に用ひら

第七十八圖 B



正倉院御物闕腋袍

れて居る。且つ此の腋を縫ひ開ける服は我國の氣候に適すると見え、狩衣に水干に廣く取り入れられて居る。元來長衣を乗馬や行動に便なるやうに開けたのである。

第七十八圖に参考として正倉院御物闕腋袍の寫し圖を掲ぐ。

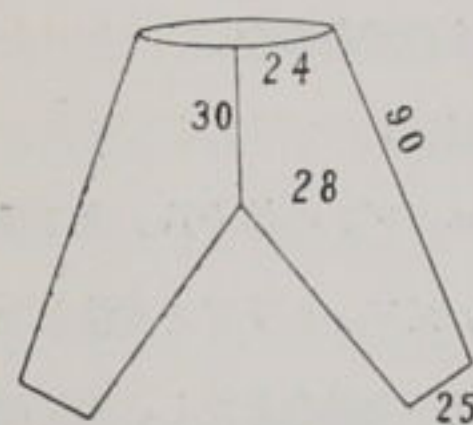
括袴 第七十七圖の中に括袴が見られ、一般男子に用ひられた。

婦人服 サルマティアと異なる點は、ダシアンは貫頭衣の服を數枚重ねて着し、其の丈も幅も寛かに作られて居る。（Le Costume 圖版第六十二頁参照）

ズボンの裁縫の原始と發達に就て 前記のベルシヤ、スキティア、バルティア、サルマティア、ダシア、イリリア等に行はれた原始的のズボンは、

如何に裁縫せられて居つたか、A History of Costume. の著者は第七十九圖の如く長方形の布を幅を二つに折り、折り目を脇とし、胯止りより下の幅を裾口を細くする爲めに、斜に幅を裁ち落したもの、左右二枚取り、上部を胯上として縫ひ残し、胯止りより下を筒に縫ひ、次に左右を合せて胯上を前後續けて縫ひ合せたものと解して居る。

第七十九圖

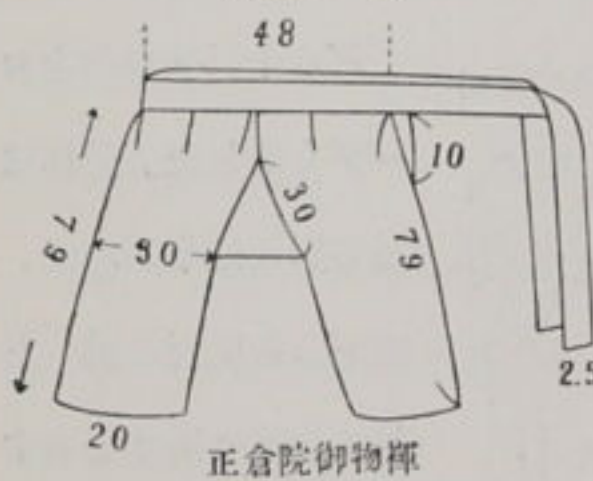


是れの参考となるものは、第八十圖に示すゲルマン族の原始時代のズボン（西紀前三・四世紀のもの）の遺物である。是れは第七十九圖の裁ち方とは反對に、體の前後に布を當て、體の輪廓通りに裁ち、脇と胯下の裁ち目を前後縫ひ合せたものである。

第八十圖——ゲルマン人の原始時代ズボン 口繪第八頁参照

又第八十一圖に示す如く、我が國の奈良朝時代（西紀六世紀）の褌の遺物（正倉院御物）で、是れは長方形の布の幅を二つに折り、是れを脇

第八十一圖



正倉院御物褌

とし（又は布幅に依ては脇に接ぎ目を付け）、裾を少し細く裁ち、胯下を前後縫ひ合せ、胯上には三〇輻乃至三五輻の正方形の襠を三角に折り、折り山を胯下に向けて前後の胯上に跨らせて置き、左右の布の胯上の縫目を、其の襠

にと縫ひ合せ、上部に紐を付ける時に幅に三つ四つ襠を取る。我が上古時代の埴輪に見られる胡服系の褌も、此の裁縫であつたであらうと推定せられるのである。

以上の三種の裁縫に於て、最も原始的に幼稚なものは第二のゲルマン族

の遺物に見る裁縫である。次は七十九圖であり、最後は八十一圖である。七十九圖の脛上に縫ひ目をつける仕方は後世歐洲のズボンの裁縫に發達して居り、我が國に於ては、徳川時代の末まで袴の大部分はこの第八十一圖の正倉院の禪の裁縫に依つて居る。此の西部アジアの古代ズボンの裁縫は此の三種の順序で發達して行つたものではなからうかと思はれる。而して我が國の禪は胡服の袴の流れであるが、その裁縫の仕方が彼の地方に見られぬならば、我が國に於て獨特に工夫せられたものであらう。

ヒ ッ テ イ ト (Hittite)

此の民族の文化に就ては未だ明かでないが、エジプトの第十八、九王朝の頃に交渉があり、ラムセス二世と和議を講じ、又アッシリアと妥協した事がある。故に少くとも西紀前二〇〇〇年の頃は一大勢力をなし、西紀前一三〇〇年の頃最も榮え、間もなく急に滅亡したものであるらしい。民族は白人種の一つであつた。第八十二圖の如く筒袖の附いた腰までの丈のシャツを着した。此の裾には房が附いて居る。是れに太い帯を締めた。革製が多い、寒帯型に近い獨特の服装である。



(ヒッティト)

第八十三圖の如きローブも着した。是れは長方形又は半圓形で、腋下から反對の肩へと斜に前後に掛けて着するものである。

第八十四圖の如き螺旋狀の掛け布もあつた。是は裾から水平線に布を重ね合せたデザインの衣服である。婦人は第八十五圖の如き貫頭衣の踵迄ある丈のものを着した。

織物に就て

麻其他 エジプトにて原始時代は、パピラス、棗棕櫚、巴旦杏其他の植物の樹皮から取つた纖維を以て、繩や筵が作られた。

亞麻が後ちに纖維中の第一に用ひられ、是れを栽培する事が、エジプト全時代を通じて農業の重要なものであつた。亞麻の故郷は未だ明かではないが、パレスティナ、コーカサスには野生の亞麻があるから此の地方が故郷であらうと云はれる。エジプトにては栽培されると云ふ事で、其の亞麻の故郷がエジプトより寒く温氣の多い地方である事が知られる。エジプトには古く輸入されたもので、ラムセス二世の北方侵略から齎されたと云はれて居る。第三王朝の時代に既に王は亞麻の支配者と云ふ事が墓に書かれて居るから、當時盛に作られた事が想像される。

亞麻から纖維を取り紡績すると云ふ事は、エジプトより、シリアの方が古くから行つて居る。

エジプトにて麻布が作られる事も又特に織目の細い上等な品も、神官の服とする爲めであつた、アッシリア人の肌に直接着るシャツの名は麻布から取つたものらしく、又ヘブリューにて作られた麻布がエジプトに輸入された事も見える。

毛織 植物から纖維を取るよりも、動物の毛から纖維を取る事が、古くから行はれたであらう。毛は原始時代はフェルトとして用ひられ、後ちに織る事が行はれた。

原始時代の原料は主として羊毛で、アフリカ産の山羊、羚羊、小羚羊であつた。エジプトでは、王朝以前に、羊は既に家畜となつて居る。アジアの羊がエジプトに輸入されたのは、中王國時代と云はれる。

第一王朝の王の象牙の彫刻像は、種々の色彩のある毛織のローブを着て

居るらしい、即ちエジプト人は王朝以前までは暖く重い毛織を着たらしい。王朝以後冷い軽い麻布を作る事を知つて、麻布に代つたと思はれるのである。而して麻布は純潔なものとして神官に用ひられたが、毛織を着ては神殿に入れぬものと考へられて居つた。

羊毛はバビロニアに多く産出した、イスラエルの市場に於て、毛の賣買が行はれた事、アラビヤとフェニキアとの間に此の大きな商賣があつた事等も知られる。

以上の亞麻と毛との纖維が長い間、紡績の原料の重要なものとなつて居つた。

木綿 印度に於ては非常に古くから木綿が衣服の布に織られて居つた。アレキサンダー大王の東征の時代に西部アジアに輸入されたと云はれる。エジプトにては古代に木綿があつた事は未だ発見されない。後ちエジプトにては綿布は、麻布と同様に神官の衣服に作られ、麻布より軟いのを好んだ。然し麻布ほど純潔なものとは考へられなかつた。二世紀の頃になるとローマ人は、エジプト人が盛に綿布の衣服を着て居るのを見た事が書かれて居る。

絹 絹は此の地方に最も遅く、ベルシヤの時代に支那から輸入された。其の輸入された道は、トルキスタン、バルティアを通じて、シリア、メソポタミヤ、フェニキア、エジプト、南歐に入つて來たのである。メディアとベルシヤも同じく絹の輸入を助けた。絹は絲とも布ともなつて輸入され、西紀前二世紀には其の賣買は盛に行はれた。此の地方では絹は高價な爲め、毛や木綿や麻に混じて用ひた。クレオパトラは絹布の衣服を着たと云はれて居る。

織物 死骸を覆ふた麻布には種々な模様が見ひれる。麻布の縞、格子は

エジプトに於ては西紀前十五世紀に既に見られる。アメンホテプ二世のローブは、一吋に七十本の經絲を持つた非常に美しいタベストリー(綴織)が用ひられて居る。タベストリーは第十二王朝から見られ、第十八王朝には非常な發達をした。織物製造は男女共に従事した。

スメル人の初期にも相當に發達したものがあつた。アッシリア人も其の工業の巧みであつた事が知られる。アッシリアとバビロニアには優れた美しい織物が見られ、シリア人は非常に裝飾された布の衣服を着て居る。

刺繡 エジプトに古く發達し、特に此の技術に巧みであつた。甲に動物の模様を刺繡したのが見られる。バビロニア、アッシリアにも多く行はれて居る。

居る
王朝
る。
殿に
羊
が行
等も
よ
つた
オ
アレ
エシ
にて
だ。
ロ
て
共の
ボ
と
西
毛
て

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

K82.7 K80.8
K77.7
D 42
6

昭和44年4月 日
資学359

昭和九年十二月十五日印刷
昭和九年十二月二十日發行

定價金 50 錢

著者 岡本すみ

發行者 東京女子専門學校 研究部
渡邊女學校
代表者 渡邊滋

東京市本郷區湯島六丁目
發行所 渡邊女學校出版部
振替東京一九八二〇番

東京市淀橋區西大久保三ノ一〇六

印刷人 山口誠造

K70.8
KE45
6
'83. 8. 12
2001332

100533

